

〈研究ノート〉アジア太平洋戦争と下田

石垣, 修 / ISHIGAKI, Osamu

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

55

(開始ページ / Start Page)

53

(終了ページ / End Page)

74

(発行年 / Year)

2001-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011396>

〈研究ノート〉

アジア太平洋戦争と下田

はじめに

二〇世紀が終わろうとしている。二〇世紀は「戦争と革命の世紀」とか「解放の世紀」、「難民の世紀」などと呼ばれる。今、アジアの近現代史を振り返るとき、日本は一衣帯水の隣国から数千年もの友好関係を享受しながら、明治以降欧米列強の近代資本主義社会に接すると、脱亜入欧思想に傾注し軍国主義の道を歩んだ。その結果アジアの隣国に多大な損害と取り返しのつかない傷痕を残してしまった。

筆者は、戦後第一世代の日本人の一人として、あの戦争とは何だったのか、またなぜ侵略戦争とファシズムへの道を阻止することができなかったのか、さらに当時国家総動員体制という大きな流れのなかでそれがどのように遂行されていたのかを、自分の故郷である静岡県下田市に焦点をあてて考察することにした。⁽¹⁾ 當時の下田町民がどのようにこの戦争にかかわっていたのか、政治や行政、経済、社会、教育や文化などさまざまな面について、

アジア太平洋戦争と下田（石垣）

石垣 修

戦争体験者からの聞き取りや手記などの証言を通して、その内容を明らかにするのが本稿の目的である。

なお、この問題を扱った研究については、下田市が発行した終戦五〇周年記念誌として『海鳴り⁽²⁾ 昭和の戦争と下田』があり、市民の体験などが多く寄せられている。また、各学校の記念誌や地域の「軍友会冊子」等にもその記述がみられる。いずれも体験者の貴重な証言が掲載されているものの、内容が限定されていたり、個人的体験の絶対化や不十分な情報・知識による記述が多かったり、史実に基づく論述が不足したりしている。筆者は、本稿においてこれらの欠如部分を補いつつ、総合的な考察を行いたいと考えている。

なお、考察にあたっては静岡県史編纂委員会編『静岡県史』資料編二〇近現代五を主に活用する。⁽³⁾

一 前史

1 開港

下田は静岡県東部、伊豆半島の東南端に位置する人口約三万人の観光・水産の街で、幕末開港の地としても知られている。⁽¹⁾近世には盛んになってきた海上交通の要所として注目され、一六一六年に下田奉行が置かれて以来、下田港の守衛と江戸への上り下りの廻船の検問・監督を任務とする、「江戸大坂航路の関」が置かれた。⁽²⁾

そして一八五四年三月、日米和親条約（神奈川条約）により、箱館とともに米船寄港や物資買入れを認め、下田には領事が置かれることになった。これに先立つ同年二月、調査に訪れたペリーは「下田は、引用者註、以下同じ」外洋と接近していて完全に容易に近づける。船の出入りに便利」と満足したという。⁽³⁾

一八五六年八月、ハリスが米国総領事として下田に來航、日本初の領事館が玉泉寺に置かれた。当時の寺の様子は次のようなものであったという。⁽⁴⁾

領事館になるくらいなら焼いてしまおうという声もあったが、奉行所の命令に従い本尊を長屋に移し、本堂をカラッポにして提供した。ハリスが帰国後、汚されたとして畳を前浜で焼き、損害賠償の嘆願書を下田奉行に提出した。

2 近代の下田

次に、幕末開港以降、アジア太平洋戦争までの下田について見

ていきたい。

下田は、一八七一年廢藩置縣で発足した足柄県の所属となり、一八七六年には旧相模國と分離し静岡県に所属することになった。

近代産業については、一八八八年の下田銀行開業、一八九八年下田ドック設立などが見られた。鉱業では、一九一四年蓮台寺鉱山が久原鉱業（のちの日本鉱業）に買収され、金採掘で盛況を極め、蓮台寺・下田間に鉱石運搬用の馬車鉄道が敷設された。

アジア太平洋戦争直前の概要であるが、人口は約二万三千人。⁽⁵⁾人々の暮らしを見ると、農村部では稲作や炭焼き、養蚕、酪農・畜産などが、海岸部では天草・魚介類採取の漁労と田畑耕作などが、市街地では物資の集散地として商工業がそれぞれ営まれた。また、官公署の出先機関も集中し、賀茂郡・南伊豆の行政・商業・交通の中心となっていた。

二 加害

1 満蒙開拓団

(一) 満蒙開拓団の概略

満蒙開拓団は、偽滿州国成立の一九三二年秋、拓務省により東北を中心とした一一の県の在郷軍人五〇〇人による「試験移民」を送り出すことから始まった。これを受けて一九三六年には大量移民計画が打ち出された。それによると一九三七年を第一期とし、一期五年間に一〇万戸を移民させ、二〇年で一〇〇万戸、一戸あたり五人として五〇〇万人の大量移民を実現しようというも

のであった。⁽⁹⁾

また、少年義勇軍は一九三七年、「饒河少年隊」をモデルに「純真な少年こそ日滿一徳一心、民族協和の理想を体得するに最適任であり、彼らの奮起なくして満州国建設の聖業は達成できない」としてスタートした。⁽¹⁰⁾

(二) 静岡県の開拓団

静岡県からの開拓団の状況は、一九四〇年三月、知事を会長とする「満州開拓静岡県協力協議会」が設立され、静岡県町村長会や帝国在郷軍人会静岡県支部、静岡県教育会など二三の機関や団体が加盟した。⁽¹¹⁾

開拓団の送出は、県下のほとんどの組織を網羅しており、特別指導訓練所を設置して県民運動として展開された。その内実は「山間部の貧村は分村して満州へ行ってくれ」とか、都市部の失業対策として商工業従事者に対しては「満州開拓は未経験でもできる」といった、「大陸帰農開拓」の指導宣伝が行われた。⁽¹²⁾ また青少年義勇軍については、郷土部隊の編成が前提であったため、単に希望者を募るだけでなく教育機関が率先して人選にあたった。

(三) 第四次大成義勇隊開拓団

次に、この満蒙開拓団に下田から義勇軍として参加した外岡清氏の体験をあげる。一七歳の一九四一年四月、まず最初に茨城県東茨城郡下中妻村内原の青少年義勇軍訓練所第四六中隊に入所し軍事訓練を受けた。⁽¹³⁾ 期間は二カ月半で、訓練の内容は体操や銃の扱い方、伏せ、突撃、匍匐前進など実戦的なもので週二〇回ほど

であった。

国内訓練終了後、哈爾濱郊外の一面波訓練所鈴木中隊に入所。⁽¹⁴⁾ さらに、黒河大額義勇隊訓練所鈴木中隊に移動した。これらの訓練所を経て一九四三年一〇月、第四次大成義勇隊開拓団鈴木中隊に入団入植した。⁽¹⁵⁾

当時の様子について外岡氏は次のように語っている。

冬は近くの部隊から派遣されてきた教官により、学科と軍事訓練を行ったが、一年目の冬は寒さがこたえた。歩哨で立っているとき、ついうっかりして銃を頬につけると、くっついてしまい皮膚の皮が剥がれるほどであった。また、大東亜共栄圏構想や五族協和思想など精神教育で大和魂をたたきこまれた。義勇軍なので厳しく教育された。

(四) 現地召集

外岡氏は満蒙開拓団から、一九四四年二月一〇日現地召集され、現役兵として第七国境守備歩兵隊第五中隊に入営し、国境警備にあたった。しかし、それも半年ほどで九月には宮古島移駐となり、伊良部島守備の防衛任務についた。一〇月一〇日朝、伊良部で初空襲（後出、五「被害」の項参照）を受ける。グラマンやB 29爆撃機など乗員の姿が見えるほど低空で、焼夷弾の投下もあった。

(五) 鉱山開発

また、弓張嶺鉱業所で鉄鉱石鉱山の開発に加わった松本勇氏の体験は次のようなものであった。⁽¹⁶⁾

一九三三年の開発当時は「匪賊の巢窟」といわれた治安の悪い

僻地であったが、鉄の増産を最優先したため、開発が強行された。まず、三三人の第一陣が武装して、遼陽から荷馬車七〇台に開発用機械、食料を積んで入山した。彼もこの一員であった。開発に並行して鉄道敷設、事務所、社宅、クラブ、会館の施設も突貫工事で行われた。国民学校、郵便局、診療所、生計所の施設も完備して近代的な鉱山町をつくりあげた。社員は三〇〇人、鉱夫（朝鮮人、山東省と現地募集の工人、捕虜等）は一万人ほどであった。

2 出征兵士

(一) 満州出征

出征兵士について、まず大陸に出征した筆者の父の体験を取りあげる。父は二〇歳の誕生日の約二カ月前にあたる一九四三年七月二二日、地区連隊区司令部（静岡三四連隊）の命により徴兵検査を受けた。結果は第一乙種合格で、一月中旬に入営の日時や場所、部隊名の通知を村役場から受けた。

出征当日は天気は良く肌寒い日だった。家人は言葉少なく「体気をつけて行って来いよ」というだけだった。隣組の人達は家に集まり朝の壮行をした。寄せ書きがいっぱい書かれた日の丸を肩にかけ、千人針一卷を渡され、徒歩で一キロメートルほどの小学校に行った。八時から校庭で区主催の壮行会が開かれる。区長、小学校長、在郷分会長のあいさつに続いて本人が、「興国存亡のこの時、われ召され国家の干城となり勇躍征途にゆかんとす。元気で征きます」と力一杯の大声であいさつした。

所属部隊は満州第六九七部隊指揮隊、同隊の所在地は東安省密山県悲徳（密山から東へ一六キロ、虎林との中間）であった。虎林は「匪賊」（抗日ゲリラ）の拠点で日本軍から恐れられていた。入隊後すぐに指揮隊の気象班に配属され、地上や上空の気象観測をしたり、風向風速による弾道補正の作業をした。続いて無線班に配属になり、暗号特別教育兵となる。無線傍受が任務で戦局は良くなった。すぐ目の前からソ連の放送が聞こえた。

四月二〇日突然動員が下り悲徳を発つ。二五日釜山着、二八日夜半釜山を出航、二九日博多港に入港。博多に着くと街中兵隊で溢れていて驚いた。本土防衛のため関東軍の大部隊が動員されていることがわかった。博多では大川村に野営したり、民家の納屋に居候して、四人一組で二四時間三交替、八時間無休で防空壕掘りをした。

(二) 中支出征

続いて、菊地栄氏の体験を紹介する。⁽²¹⁾一九四三年二月一日、軍隊生活の第一歩は名古屋市の中部第二三部隊へ入営することから始まった。さっそく軍馬との生活がはじまったが、戦局の悪化に軍隊生活は大変（上陸用舟艇）乗務に急変した。その頃陸軍の潜水輸送艇が建造されたと聞き、海を潜らなければ物資を運べない厳しい戦局を深刻に受け止めた。⁽²²⁾

ついに外地へ出動する日がきた。一九四五年二月、朝鮮半島經由で中国へ渡り、南京市下関の第二船舶輸送司令部南京支部へ着任した。任務は南京より長江を遡行する船舶に乗船し安全に貨物を目的地へ届ける業務であった。昼は米戦闘機に襲撃されるの

で、航行は全て夜間であったが、米軍機から機雷が投下されてお
り、河の流れも速く大変だった。

(二) 南東出征

続いて、南東方面に出征した伊藤利喜氏の体験を紹介する。⁽²³⁾ 一
九四二年一〇月初め、伊藤氏はラバウル港内に停泊中の輸送船
「笹子丸」に乗船していた。船上からラバウル大空襲を目撃、翌
朝戦死者が出たというので上陸し、遺体処理を行った。

その後ガダルカナル島へ向かい、そこで彼は戦車や食料、弾
薬、衛生材料等を荷揚げする任務についた。空襲の激化にともな
い自傷して漂流している兵士が増え始めたので、海から救出し陸
地に運ぶ作業を行った。しかし、母船を失った彼は銃や弾薬、手
回り品などを舟艇から持ち出すとジャングルに逃げ込み、生き
残った数名で設営を開始した。翌朝も執拗な空襲で同年兵が首だ
け飛ばされ、胴だけ残るという悲惨な戦死を遂げた。このとき彼
はマラリアを再発し、途中で力つきて倒れてしまった。「基地ま
で連れて帰る」という兵長に、「いざとなったら自決するので、
かまわないで行ってください」と断ったが、意識不明の彼は引き
ずられて基地に戻ることができた。

3 中国帰還者連絡会員の証言

ここでは、出征者の体験談や手記で触れられなかった部分を補
完するために、中国帰還者連絡会員の証言から、戦争の悲惨さに
ついていくつかの体験を紹介する。⁽²⁴⁾「日本は中国で何をしたか」
という体験手記集より抜粋する。

アジア太平洋戦争と下田（石垣）

(一) 三光作戦

「一九四三年三月一九日、放火と掠奪殺人の専門組織であった
承德憲兵隊第二憲兵遊撃隊の一員として、熱河省興隆県芳山区
西方の丘陵地帯に散在する農民の家屋を襲撃した。目的は八路军
の摘発だった。中国人密偵を先頭に急襲したが若い人は逃げてし
まったあとで、老人や病人、幼児しかいなかった。彼らを表の窪
地に引っ張り出し訊問したが誰ひとり答えようとしなかったた
め、自分で引きずり出してきた七〇歳ぐらいの老婆の背中を両手
でこん棒を握って力いっぱいぶん殴った。ただ一回で老婆はかす
かなうめきをあげて死んでしまった。さらに七人の老人を次々と
射殺し、家々に火を放った」⁽²⁵⁾

(二) 強姦

「私は中国に初年兵として上陸以来、半年も満たないのに擲弾
筒手として四回もの『討伐』行動に加わっていた。皆の寝静まっ
た夜九時過ぎ、一人で帯剣一本に手榴弾を懐にして忍び出て、
やっと『昼間の』家にたどりついた。泥靴で布団の上に飛び乗り
窓際の女を目がけて襲いかかった。その女性は病気の幼児を抱い
ていたが、引き離れた赤ん坊がオンドルの中央へ転がったとき泣
き声が耳をつんざいた。私はこの赤ん坊を吊るし上げ、オンドル
の焚き口に湯気をあげていた大きな釜に投げ込んだ。煮え湯に放
りこまれた赤ん坊は『ギャー』と釜の湯を吹き上げ悲鳴をあげ、
母親の『キー』と絹を裂くような叫びが壁をゆすぶった。悲痛の
叫び声をあげ抵抗する母親を頭から布団をかぶせ蹂躪した」⁽²⁶⁾

(三) 監獄

「私は満州国で一〇年あまり監獄吏(長)をしていた。石鹼、タオル、歯磨き粉などの日用品はおろかチリ紙一枚やらなかった。だから使用の時は着物の端を破って使い、飲み残した飲用の水で洗い、乾かしては次にまた使った。ある時、破れ布団の綿を引き抜いて使った在監者を発見、『どうしたらよいですか』という反問が、反満抗日だとして制裁を加え、昏倒するまで殴り、手錠と脚錠をつけて暗室にほうり込んだ。それがもとでその人は病気になる死んでしまったが、医者に命じ『心臓麻痺』ということにして処理した」。

(四) 生体解剖

「私は第一一七師団野戦病院の軍医で、一九四五年四月河南省焦作鎮に駐留していたとき軍医教育の名目で生体解剖を行った。当日午後、憲兵分遣隊より連行された『八路の密偵』という中国人男性を受け取り、二人の新米軍医と衛生軍曹、衛生兵、病院長の六人で開腹や切除術を行った。抵抗する男を押さえ付けクロルエチルで麻酔をかけた。

まず、右下腹部を一〇センチばかり切り開き、型のごとく盲腸の手術が行われた。次に、みぞおちのところからへその下まで三〇センチにわたり、腹の真ん中を開いて内臓の点検が始まった。

続いて右腕と左大腿を切り落とす手術を同時に行った。私はこの男の静脈にどのくらいの空気を注入したら死ぬだろうかと、二〇cc入りの注射器でやったところ、半分ほど空気が入ったところで左胸の心臓に相当する部位で、不気味なグルグルという音が聞こえた。そのとたん中国人の下顎が静かに動きだし、二―三回大

きな呼吸をしたかと思うとガックリと顎をたれてしまった。聴診器をあてると心音は聴取されず、サアーという雑音だけであった」。

4 抗日運動と兵士の証言

(一) 東北地方の反日闘争

中国東北地方は朝鮮と約三〇〇キロメートルにわたって国境を接し、多くの朝鮮民族が往来していたが、韓国併合による武断統治や土地調査という名目で土地を奪われたことなどにより、中国側への移住を余儀なくされた。そして彼らの最大の居住地域である間島地方は朝鮮独立をめざす運動グループの拠点となり、日本軍との衝突が続いていた。一九三六年八月、東北抗日連軍が結成された。東北抗日連軍は張学良の軍隊に取って代わり、農民大衆の熱烈な支持を受けて反満抗日の主力となった。

(二) 元東北抗日連軍兵士

筆者は、一九八五年夏中国東北地方を訪問し、その時、抗日戦争をたたかった二人の「元東北抗日連軍兵士」と会見し、当時の体験を聞くことができた。

そのひとり、梁成玉さん(一九二〇年生まれ、男性)は佳木斯の出身で、一九三五年に一五歳で東北抗日連軍に参加し、第六軍団第三旅団(旅団長・王明貴)に所属した。その動機や活動について次のように語った。

私は毎日のように関東軍と戦い、多いときは一カ月で三八回も戦闘しました。食料もだんだんなくなり、草や木の皮、軍

服の綿などを食べて飢えをしのぎました。夏は高梁畑のなかで、冬は雪の中で生活しながら関東軍と戦い続けました。負傷しても医薬品はなく、傷口に灰を塗るのが唯一の治療でした。重傷になった兵士は皆に迷惑をかけまいと手榴弾で自決しました（通訳は王慶英、鈴木和子の両氏による）。

また、楊敏さん（一九一七年生まれ、女性）は虎林の出身で、一九三七年に二〇歳で東北抗日連軍に参加し、第七軍第三師団（軍長・李学福）に所属した。楊さんは次のように語った。

日本軍の三光作戦を自分の目で見たことが、抗日連軍に参加するきっかけとなりました。日本軍は共産党員一人を殺すために、村人一〇〇人を一緒に殺害しました。私はこれを見て、中国人はたちあがる以外に生きる道がない、亡国奴となるよりは中国人として生きたいと思って抗日連軍へ参加する決意を固めました。（同上）

以上、本章では日本軍による中国人に対する加害の状況について見てきた。加害者側の犠牲者も相当数にのぼり、下田からの出征者約一九〇〇人のうち、九七二人が戦死した。その場所は、中国戦線が圧倒的に多く二五六人で、全体の二六％にあたる。激戦地での戦死者が目立つが、投降をせず徹底抗戦の果てに自害した結果によるものが多い。また、直接戦闘によらない輸送中の海没死、マラリアなどの病死、南方やシベリアでの餓死、特攻死なども特徴的である。⁽³⁰⁾

三 銃後の守り

1 国家総動員体制

日中全面戦争の翌年一九三八年三月には国家総動員法が成立し、その後、戦時経済体制を確立するために、国民精神総動員運動や政党の解散、大政翼賛運動などが行われた。それらは町内会・部落会・隣組の強制整備を伴いながら、下部末端の組織・個人に至るまで徹底された。

例えば国民精神総動員運動では隣組が利用され、一週間を「時局生活の日」「出勤兵士感謝の日」などに分けて、それぞれ具体的な行動が行われた。⁽³¹⁾

一九四〇年一月一日には静岡県総務部長、学務部長、経済部長、警察部長、土木部長連名で、各部長、市町村長、学校長、職業紹介所長あてに「紀元二六〇〇年紀元節奉祝に関する件通牒」が発せられた。⁽³²⁾

一方、戦争推進政策と反対勢力の一掃も同時に行われ、反対勢力は徹底的に弾圧された。さらに、明治以来の「脱亜入欧」や、満州国成立時の「五族協和」、近衛内閣による「大東亜共栄圏構想」など民族意識の高揚が叫ばれた。また、「八紘一宇」（天皇のもとに全世界を一つの家に統一する）のように国家神道と天皇制による暴力的絶対支配体制（ファシズム）が確立され投獄、処刑、村八分などが行われた。そして、一億火の玉となってこの戦争が戦われた。

2 下田防空監視隊

下田は海上交通の要所に加えて、本土空襲に向かう米軍機のマリアナや硫黄島からの進入路にあたり、防空という点からも首都防衛の要所であった。

下田では防空法（一九三七年四月公布、一〇月施行）制定以前から防護団が結成され、防空演習や監視哨の活動が行われていたが、防空法制定後はよりいっそう組織化された。その特色は女子の監視員をもったことである。「下田女子防空監視隊」の樺ひろ子さんの体験を紹介する³³⁾。

一八歳で下田警察署内に設置された監視隊本部に勤務した。報告内容は発見時刻、発見方向、敵味方の区別、機種、爆音聴取、高度、進行方向（旋回、脱去の別）等を記入する。一の監視哨から一斉に報告があると、情報用紙五〇〇枚にもなった。「一九四三年から「一九四四年初め頃は味方機が多かったが、「一九四四年一〇月頃から敵機発見の情報や、海上の船舶、潜水艦、照明灯等の情報が増えた。

3 戦争と女性

男子が出征したあと、残された女性の役割は重要であった。「兵隊さんは命がけ、私たちはタスキがけ」と、経済的に一家を支えながら子供や親の面倒を見、さらに防災など地域の活動にも参加するなど、職場・家庭・地域で女性の力が発揮された。

日清戦争後設立された愛国婦人会と一九三二年に発足した国防

婦人会が全国に発展し、一九四二年に両者は合併し大日本婦人会となった。その内容は、「比類なき我が国体の源を極め不良思想の跡を絶ち、常に忠孝の赤誠を以て国の護りの固き礎となりませう」等というものであった。³⁴⁾「女たちは晒木綿で腹巻を作り、赤い糸を千人の手で一針づつ結び、寅年の人が結べば「虎は千里を走って戻る」の故事にあやかって無事戻れると、「寅年の人に」結んでもらった」³⁵⁾（胎中スエノさんの体験を手記より抜粋）。

戦時社会はどのようなものであったのか。一九三九年九月に興亜奉公日が定められ、神社参拝や勤労奉仕などが義務づけられた。第一回興亜奉公日の実施概況によると、一斉休業を断行し、①最寄り神社に参拝し、皇軍将士の武運長久、戦傷勇士の平癒祈願、②戦歿兵士の英霊に対する黙禱、墓参及墓地の清掃、さらに婦人従業員（芸娼妓、酌婦、女給、女中の例）の紅・白粉の廃止など一般人以上の自粛振りを発揮したなどと報告されている³⁶⁾。

旧町内に住む土屋シヅさんは、「警報が出ると家の畳をはがし、自分たちで掘った防空壕に入った。雨降りの後などは水浸しだったので、たらいを浮かべて子供達をその上にのせた」と当時の様子を記している³⁷⁾。

また、中国・広東の陸軍病院で夫を失い、戦争未亡人となった近郊の女性の体験を、娘が「母は子供二人を育てながら、夜中までかかって束ねた野菜を翌朝山越えて町まで背負って売って歩いた。朝の暗いうちから星を仰ぐまで働きづめであった」と記している³⁸⁾。

さらに、防諜に関して防空監視隊の体験もある銀行員だった高

橋多賀子さんは、「銀行の二階を兵隊に貸したら、その二、三日後に爆撃を受けた。スパイでもいるのかと話題になった」と語っている。

4 官製社会運動

(一) 産業報国会の実態

次に、産業報国会、商業報国会、農業報国会など戦時下の官製社会運動について見ていきたい。

まず、鈴木式織機株式会社（以下、鈴木織機と略す）の産業報国会の実態について引用する。

さて、同社の産業報国会は昭和十四年（一九三九年）二月一日、紀元節を以て創設した。其の実施事業の要項を挙げれば次の如くであって、凡て国家本位に立脚し、又各職場よりも評議員を選出して熟議し、意志の疎通を図り、労使協調の実を挙げんことを期している。（一）日本精神の発揚。（二）産業報国精神の顕彰。（三）厚生共栄の増進。（四）銃後後援の強化。（五）非常時国策への協力。

これは、『商と工』一二〇号（一九三九年一月）に掲載されたものであるが、鈴木織機ではこのほかに役員修養会を行い、「近くの寺で皇軍将兵の武運長久を祈願し、戦歿将士の英霊の冥福を祈り、宮城を遙拝した」と報告されている。

次に、商業報国会であるが、一九四一年一月十四日に約七〇〇人が参加して、静岡県商業報国会本部が結成された。その内容は「時局の重大化に伴ひ、総合的計画経済遂行の一翼たる物資配

給担当者の使命いよいよ重要性を加へたるに鑑み、県下の団体三五組合は打って一丸となり、商業新理念と新機構に基き、職分奉公の決意も固く八紘一字の大理想達成に邁進すべく」というもので、主な事業は「配給機構の整備確立、企業合同の研究」等々であった。⁽¹⁾

農業報国会については、「本支部は農業報国会並静岡県農村計画委員会と連絡し、農業報国精神の昂揚、実践を図るを以て目的とす」「支部長は大政翼賛会総裁之を知事に委嘱す」とあるように、やはりここでも全てが国家総動員体制の中にがっちり組み込まれて運営されていた。特に食料増産は至上命題であって全町、全県で実施された。⁽²⁾

さらに、林業報国会についても、静岡県経済第二部長名で地方事務所長と各市町村長あてに、「木材、薪炭、其の他重要林産物の生産に確固たる基礎を与ふると共に、林業勤労者の総力を最高度に発揚せしむる為、左の要領に依り林業報国隊組織を確立し、之が適性なる運用を期せんとす」という通牒を發出し、林業勤労組織確立を指導している。

また、大政翼賛運動は県知事を長とし、各郡や市に支部が結成され、青・壮年、婦人を中心に大東亜戦争完遂翼賛選挙貫徹運動などを行った。

(二) 河津鉱山の産業報国会

次に、下田での産業報国会であるが、当時の代表的産業であった日本鉱業河津鉱山の連台寺鉱区に建設された機械選鉱場では、「軍需省伊豆開発本部河津選鉱場」の看板がかけられ、軍需省の

指令によりアルミの原料となる蛍石の選鉱が行われた。

ここでの産業報国運動であるが、社員であった佐々木千義氏によれば、「従業員全員が産業報国隊を結成し、在郷軍人などと規律訓練を行い、産業戦士としての自覚を持たされた」(註(2))前掲書、一一〇頁)といい、鈴木織機と同様の運動が行われていたと判断することができる。なお、朝鮮人に対する融和策の一環として河津鉾山の鉾業報国の記録があるので、後述の6「朝鮮人・中国人の強制連行、強制労働」で補足したい。

5 学徒勤労働員

(一) 下田の学徒勤労働員

下田の学徒勤労働員は、一九四四年七月以降豆陽中学校の五年生七〇人が町内・丸山の「警城セメント会社」や、三〇人が仁科の「戦線工業」に動員された。四年生は一〇〇人が神奈川県寒川町の「相模海軍工廠」へ、三年生は一五〇人が沼津市の「沼津海軍工廠」へ、また、女子は三年生一〇九人が「沼津海軍工廠」へ、四年生八五人が「横須賀海軍工廠追浜分工場」と、横浜市金沢区の「海軍航空技術廠」等に兵器や軍事物資の製造・修理工作として動員された。⁽⁴⁾

ここでは豆陽中学校の生徒と、大学生として上京していた下田出身者の、当時の様子や勤労働員の体験について紹介する。⁽⁵⁾

(二) 相模海軍工廠

まず、五年生の体験であるが、一九四四年八月八日から一九四五年六月二日まで、約一〇カ月間神奈川県高座郡寒川町の相模

海軍工廠へ学徒勤労働員された石垣肇氏の体験をあげる。当時、同氏は一六歳であった。⁽⁶⁾

相模は工員・学徒合わせて約三〇〇〇人、全員寮生活である。

学徒動員者は一四校で約一二〇〇〇〜一三〇〇〇人。⁽⁷⁾朝鮮人徴用工が約二〇〇人で、地下工場作りのため土木工事に従事していた。

九月一日、やっと第一火工部第三工場に配属が決まる。作業はゴムの前掛けをして空爆弾を分解し、蠟やサビを落とし、空色にペンキを塗る作業だ。ガス弾には頭に黄色い輪を書く。尾翼四枚をつなぐ鉄片も黄色く塗り、翼の間へ毛筆で製造年月や種別を記入すると丸で囲み数字や記号を入れる。①は弾体、②は炸薬、③は充填したガス薬を示す。この作業のないときは、空弾や爆弾箱の運搬をする。また、炸填班では、日本鋼板社製の空弾の中にイペリットと炸薬を入れ、パラフィンを流して固定し、胴部と尾部をビスで止める作業を行った。これを塗装して記号を記入し、ゴロゴロ転がして検査掛で仮の信管をつけて重量を測定、また信管をはずして荷造りし牛車で工廠駅へ発送した。

作業以外では総員起こし、防空訓練、防空壕掘り、不寝番がきつかった。しかし、休日には平塚の東宝劇場や平塚劇場へよく映画を見に行っている。内容は娯楽と戦意高揚ものである。⁽⁸⁾

(三) 沼津海軍工廠

次に、三年生(一五歳)の体験として、一九四五年六月から八月一日まで沼津海軍工廠へ動員された鈴木昭太郎氏の例をあげる。⁽⁹⁾

出発当日、学年一五〇人全員が校庭に集合、荷物は着替えの日

用品が入った行李ひとつで、工廠で用意した幌なしトラックに一台五〇人が乗せられた。デコボコ道の天城を越え、途中空襲警報でトラックに乗ったまま木陰に隠れたりして目的地の沼津についた。

沼津海軍工廠では無線機（電波探知機、即ちレーダー）を作っていたが、工場での仕事はやらず、道路の端を片付けてそこを耕してサツマイモを作ったり、材料を運んだり雑役夫のような作業をした。仲間の一部五〇人は途中から天城分廠に移ったので、皆家が近くなったとうらやましがった。ここでは松根掘り作業が行われた。松根は油を絞り取り飛行機の燃料に使った。

（四）在校生

続いて、一九四五年四月に入学した、当時一三歳の鈴木稔氏の体験をあげる。⁽⁵⁰⁾一学期で終戦になったが、須崎の浜（現在、御用邸になっている三井の浜）から山頂の砲台まで砲弾を運んだり、寝姿山の頂上にサツマイモの苗を植えたり、学校のグラウンドを掘り返してイモ作りなどした。

（五）特別甲種幹部候補生

最後に、下田市出身で大学専門部在学中の鈴木精一氏の体験をあげる。⁽⁵¹⁾彼は一九歳のとき、一九四四年一〇月から一九四五年三月までの半年間、豊橋第一陸軍予備士官学校に特別甲種幹部候補生として教育を受けた。毎日猛訓練であった。卒業後は見習士官となり伊豆大島に配置され、そこで敗戦を迎えた。

6 朝鮮人・中国人の強制連行、強制労働

アジア太平洋戦争と下田（石垣）

清水市の全徳順さんは「私が一六歳のとき二一歳の主人と結婚したが、七カ月後のある日、主人が朝食後ふだん着のまま外へ出て行ったがそれっきり帰ってこない。三年くらいたってから風の便りに樺太の炭鉱で働いていたと聞き、⁽⁵²⁾本当に嬉しかった。徴用で連れて行かれたんです」と証言している。

静岡県内への主な連行先は、鉱山、発電工事、軍施設建設、地下工場建設、軍需関連企業等の約五〇カ所で、一万五〇〇人以上が動員された。中国人は県内五カ所へ一二六〇人が連行された。また、朝鮮人慰安婦は一九四四年七月ころ南方派遣予定だったものが、輸送状況悪化のため約一〇〇人が静岡市に転送され、性奴隷にされた。大井川上流・久野協の発電所建設現場でも朝鮮人女性の遊郭が確認されている。⁽⁵³⁾

朝鮮人の管理は協和会により運営された。事業計画によれば、「半島人をして国風に訓致せしめ、以て内鮮融和の実を挙ぐる為、県と共同主催を以て半島人の在住多き地方の市町村吏員、及共和会支会役員中より指導者を選び、一泊講習を行はんとす」と、くまなく講習会計画が示されている。

さて、下田での朝鮮人強制連行であるが、日本鉱業河津鉱山に認めることができる（中国人については下田では認められない）。一九四〇年二月一六日、忠清北道清州郡から二二人が連行されたのを皮切りに、一九四二年三月末までに一〇四人が、さらに一九四二年一月には最高の一七七人が連行された。連台寺鉱区は最盛期一〇〇〇人が働いていたが被連行の朝鮮人は常時一〇〇人前後であった。⁽⁵⁴⁾

蓮台寺鉦山で坑内助手をしていた新農孟竜氏は一九歳の一九四一年一月二三日、慶尚南道から強制連行された。この坑内労働が原因と思われる肺気腫のため、一九九九年三月四日、七六歳で亡くなった。彼は「切羽で」支柱を組み立てる作業をしていて、当時は防塵マスクなどしていなかった」という。配偶者で「在日」のひつえさんは、「二三歳のとき家族と一緒に日本に来て、一七歳で結婚した。戦争はいやだ。違う国で苦勞した。鉦山が原因で十数年の闘病の末、ここ数年は『酸素』が離せず、苦しんで死んでいった主人はかわいそうだ」と語った。⁽⁵⁸⁾

このほか坑夫や雑夫として選鉦や運搬などの作業をしたが、前述の佐々木氏（元社員）は「彼らは日本人の」係員が朝鮮まで出張して募集した希望就職者である。強制労働等は全然無く、当時は日本に協力した時代であったように思う。住宅は蓮台寺及び支山共に合宿所があり、賄婦を雇って食事の世話をした訳で給料も相当な支給があった」と記している。⁽⁵⁹⁾

しかし、連行二カ月後の一九四〇年四月二〇日には蓮台寺鉦区で、朝鮮人監督更迭要求の争議があり、七月一七日にも須崎鉦区で家族呼び寄せ履行を要求する、林海成ら二八名のストライキが行われている。当時同じ学区の小学生だった鈴木稔氏（註（50）参照）は、「鉦山の長屋に住む朝鮮人はバカにされ、大変貧しい生活をしていて。学校ではおかずのない弁当を半分づつ、隣の教室の兄弟と食べていた」と体験を記している。また、小学生のころ宿舎をのぞき見した土屋直司氏は「部屋に長い丸太棒があり、それは一斉に横になって寝るための枕だ」と聞かされて驚いたと

記している。⁽⁵⁸⁾

賃金についても、浜松市の李さんは「同じ仕事をしても朝鮮人は日本人の半分だ。日本人は六円、朝鮮人は三円だ。その上、何々貯金だ、慰問金だ、会費だといって天引きされた」と記している。⁽⁵⁹⁾

続いて彼らに対する融和策について、先述の産業報国運動とも関連して見ていきたい。河津鉦山における内鮮融和方法は、「半島人に対しては、先づ彼等の偏見を一掃す可く、飽迄懇切に、苟も疑義を差挿む余地なき様、指導員をして之に當らしむると共に、一方短期講習会を開催し、毎夜午後六時半より七時半迄、一時間国語の教授及国民精神の陶冶を図り、併せて鉦山智識を扶植し、以て鉦業報国精神の喚起に努めたり」としている。⁽⁶⁰⁾

このように戦時下の町民は、勤労者も商業者も農業者も林業者も、また学徒も女性も例外なく報国運動に組み敷かれていった。現在の世帯数は一万一一八戸であるが、当時は四八八七戸と少なく、より浸透したものと推測できる。

四 本土決戦と防衛基地

1 本土決戦

本土防衛に関する「捷三号作戦」は航空作戦が主体であったが、伊豆半島などの海岸に砲台建設が指示された。四月八日には「決号作戦準備要綱」が各方面に具体的に出された。中国大陸で遊兵と化していた陸軍の大部隊は直ちに本土決戦に動員されるこ

となる。これを裏付けるように、関東軍にいた筆者の父はこの時（四月二〇日）、「満州」から北九州防衛のため移動した。

六月二〇日に出された「本土決戦根本義の徹底に関する件」は次のとおりである。⁽⁶⁶⁾

「本土決戦は正に字義通りの決戦にして、上下挙げて絶大な闘魂を振起し、犠牲の如何を顧慮せず徹頭徹尾決勝の一端に邁進す」

八月三日に出された第二二方面軍の作戰計画「決三号作戰計画」はさらに具体化され、「関東沿岸に上陸する敵を沿岸地域において撃滅する。主決戦正面を九十九里浜正面と予定し、決戦時期を四五年秋季以降と予想する」というものであった。⁽⁶⁷⁾ しかもこの戦闘指導は、「敵の上陸海岸の汀線に向かって後方兵団を遮二無二突進させることとした」という特攻作戦であった。⁽⁶⁸⁾

2 陸軍輸送暁部隊

軍事補給基地としての下田には、第二二方面軍傘下の第一三船舶団の高速輸送隊と潜水輸送隊が配備され、伊豆諸島への海上・海中輸送が行われた。

まず、高速輸送部隊であるが、「暁第一六七〇七部隊」と呼ばれ、ソ号高速艇を使用して兵員や物資の輸送などが行われた。⁽⁶⁹⁾

次に、潜水輸送隊であるが、「暁第一九八九六部隊」と呼ばれ、潜水輸送艇を使用して同様の輸送が行われた。⁽⁷⁰⁾ 一九四五年四月、潜水艇六艇からなる約二〇〇人の「第一潜航輸送隊」一個大隊が下田に配置された。平野屋旅館に本部を置き、東京文理科大学研

究所（現、筑波大学臨海実験所）を宿舍とした。

この乗組員（無線分隊長）であった高橋鉄之助氏は当時の様子を次のように語っている。「八丈島へ主として食糧、工事用セメント等を厚いゴム袋に詰めて輸送した。暗くなる前に下田を出港、浮上航海して八丈へは朝到着した。そこで荷物を取りにきたダイハツ艇に引き渡し、作業完了と同時に海底深く沈座し、夕方浮上し夜間航海で下田に帰港するというものであった」。

鍋田海岸は下田湾西側の静かな入り江で、筆者は中学時代（下田市立下田中学校）に体育の授業で水泳をしたことがある。その専用岸壁は今でも確認することができる。

3 陸軍の防衛配備部隊

一九四四年初頭から本土防衛体制の強化が求められていたが、五月になると「皇土防衛作戰要綱」が出され、本土沿岸の戦備強化と迎撃態勢が準備された。七月には東部軍司令官の下命により築城のための陣地偵察が行われ、一〇月末には下田周辺に上陸防御用の臨時砲台や野戦陣地が築かれることになった。

各派遣部隊の経理室は「玉泉寺」に置かれ、作業隊宿舎は元日本鉱業河津鉱山須崎跡地にあった。さらに、一九四五年になると従来の軍組織が再編強化され、下田は第二二方面軍（東部）の戦闘序列に編入された。そしてその一部（房一三三六部隊）が下田に沿岸砲台築城のため進出した。この部隊は、本部を豆陽中学校構内に置いた。当時二年生であった池谷淳氏は「校庭で兵隊の全員制裁を見た。年老いた補充兵が相対で並び、相互に互いの頬

を殴り合い、若い将校が『もっと強く』などと号令していた」と記している。⁽⁸⁸⁾

4 海軍第一六嵐部隊

次に、特攻基地としての下田であるが、一九四五年三月下旬水上特攻隊が本部を開設した。

下田に置かれたのは第二六突撃隊（第一六嵐部隊第五七震洋隊）で相模湾方面を攻撃海域とした。実際に和歌の浦基地に展開したのは七月一日で、隊員数一七五人、配備艇は一型五〇隻であった。周辺の稲取には第一四〇震洋隊が、石廊崎には第一三七震洋隊が、小稲には第五一震洋隊が配備された。⁽⁸⁹⁾

これに先立ち、三月下旬より藤沢航空隊の抜井部隊が、震洋の格納壕や城山公園の機銃陣地を構築した。

当時、周辺一帯は立ち入り禁止で漁に出るときは許可証と本人証明書が必要であった。町内の山田旅館はこの作業隊の本部になり、作業隊が引きあげたあとは特攻隊の指令部になった。また、下田高等女学校には第一六嵐部隊の通信兵が駐屯していた。⁽⁹⁰⁾

さらに、八月一三日には水中特攻部隊である「第六海龍隊」が横須賀基地から自力航海で下田に展開した。⁽⁹¹⁾ 第五七震洋隊と第六海龍隊は実戦に参加することなく敗戦を迎えた。しかし、敗戦後一〇日ほどはこの第一六嵐部隊が武装解除せず徹底抗戦を叫んだため、下田は「危険地帯」であった。その様子は「嵐部隊の兵士たち、『皇軍は健在なり』と呼号しつつ街中をグループにて歩く。詔勅を拝したというに奇異の感じなり」というものである。⁽⁹²⁾

五 「被害」

一九四四年一月末から敗戦まで、マリアナ基地から飛び立った米B 29爆撃機による本土空襲が行われた。全国六六都市が攻撃目標にされ、東京や横浜、名古屋、大阪など大都市が空襲を受け焼け野原になった。沖縄では地上戦が行われ多くの非戦闘員の県民が犠牲になった。空襲による人的被害は九カ月間で死傷者約八〇万六〇〇〇人（死者三三万人）で、アジア太平洋戦争全期間における軍人の戦死者七八万人を上回っている。⁽⁹³⁾

1 日本空襲

まず本土空襲について、日本が最初に空襲を受けたのは、一九四二年四月一八日、米空母ホーネットを発進したドウリットル隊によるB 25爆撃機一六機によるものであった。

次の空襲は、一九四四年六月一六日、中国成都基地発進のB 29爆撃機による北九州爆撃であった。⁽⁹⁴⁾ この空襲は八幡製鉄や大村海軍航空廠を主目標に、一九四五年一月六日の大村爆撃まで一〇回に及び、本格的な本土空襲の幕開けとなった。⁽⁹⁵⁾

一九四四年一〇月一〇日には、米海軍機動部隊の艦載機が沖縄本島一帯に激しい攻撃を行い、那覇市街地のほとんどが廃墟と化した。市民の九割が焼け出され、日本の都市で初めての壊滅となった。

一九四四年一月二四日、マリアナ基地から飛び立ったB 29による初の本土空襲が開始された。目標は北多摩郡武蔵野町の中島

飛行機武蔵製作所であった。B 29 による本土空襲は出撃機数延べ三万三〇四一機、投下爆弾一四万七〇〇〇トン（全体では一六万八〇〇トン）で、日本の主要産業と主要都市を破壊し尽くした。⁽⁷⁶⁾ 浜松市の場合、他の地方中都市と比較して最も激しい空襲に見舞われたが、日本空襲を指揮したカーチス・スルメー少将は「出撃したもの、いろいろな都合で第一目標を攻撃できない場合には、装備していた爆弾は浜松に投下して帰るよう指示されていた」と述べている。⁽⁷⁷⁾

2 下田空襲

(一) 空襲の概要

下田は一九四四年一月末から、空襲や艦砲射撃を受け、その結果住民九七人が死亡した。⁽⁷⁸⁾ また、下田以外で東京空襲や長崎原爆で死亡した下田の町民は二〇人である。⁽⁷⁹⁾ それはほとんどがB 29 爆撃機や、小型陸上機、近海の空母艦載機によるものであるが、この数は浜松三五四三人、静岡一八八三人、清水三三七人、沼津三二八人、磐田一六二人に次ぐものである。⁽⁸⁰⁾ 下田の空襲は約九カ月間で十数回に及んだ。⁽⁸¹⁾ これらの空襲のうち、被害の大きかった二件と特徴的な数件について見てゆきたい。

(二) 四・一二空襲

四月一二日午前一〇時二〇分頃、東方より単機侵入したB 29 から一発が投弾された。これは下田港河口岸壁で輸送船に乗船するため整列集結していた陸軍晩部隊の兵員百数十人と輸送船を狙ったものであるが、進行方向にあたる市街地の住民に大きな被害が出た。

害が出た。

下田国民学校校務日誌は当日の様子を次のように記している。「B 29 一機来襲し町内に投弾す。死亡児童五名、重傷一名、家を失いたる者一名、家族全員犠牲となりたる者二名、軍、民間の犠牲者五七名に達し、一三〇メートル距離間に一発投弾あり。家屋の全壊一五戸、半壊二三戸、被服を失いたる者九名、校舎のガラス破損損大、奉安殿御安泰。憤激の血躍るを覚ゆ」。

また、この空襲を体験した前述の望月氏は「落下地では、数多い家屋の倒壊、被爆地点がえぐられた穴の大きさに驚くとともに、つぶされた家屋の下敷きになり圧死した人も数十人に及ぶとかわれ、助けを求める悲痛な声も聞かれる光景にも接した」と一瞬にして目の前におこった惨憺たる被害と、初めて体験した爆弾の猛威の様子を記している。⁽⁸²⁾

一方、米軍資料によると、四月一二日の攻撃は二八六機が出撃している。このうち下田を攻撃したB 29 は、第二目標に三菱重工業静岡発動機製作所（現、三菱電機静岡工場）を攻撃した一機のうちの一機と推測される。⁽⁸³⁾

(三) 六・一〇空襲

二番目に被害の大きかったのは、六月一〇日午前八時一五分頃、やはり一機で侵入したB 29 によるものであった。了仙寺境内に退避していた海軍第一六嵐部隊と、下田高等女学校に宿営の同分隊員二十数人が行進中発見され被弾した。

この空襲を体験した渡辺孝氏は手記に次のように記している。⁽⁸⁴⁾ 「B 29 は上空から兵隊を発見すると、右に大きく旋回して海上に

出て、エンジンを絞りを殺して低空で春日山の山頂をかすめるようにして侵入し、投弾してきた。また、望月氏の日記には次のように書かれている。「すさまじい炸裂音あり。次々と担架で運ばれ、鮮血はとばしる負傷者を目撃、その惨状まさに地獄絵そのままである。何処から出たデマだったか『五日から一〇日の間におみやげをする』のピラは事実となった。敵米のなさんとせば、必ず敢行できる実力に驚愕するのみ。神国日本の前途暗し」。米軍資料によると、六月一〇日は三一二機が出撃している。これは、上空から攻撃目標を捜していたB29が兵隊を発見して投弾したものであるが、望月氏の日記によれば、攻撃予告のピラが撒かれた様子もうかがわれ、駐屯軍が目標になっていることを示している。⁽⁸⁷⁾

(四) その他の空襲

まず、一九四四年一月二四日、B29による下田湾への投弾は第七三航空団によるもので、マリアナ基地からの初の本土空襲であった。⁽⁸⁸⁾九〇年前に開港を求めて黒船が投錨した湾であり、日本初の米領事館が置かれた親善友好の地に爆弾が投下され、下田の町民を驚かせた。

次に、八月一三日の空襲について述べる。午前九時頃、房総沖の米第三艦隊（ハルゼー隊）の第三八機動部隊から発進した、グラマン戦闘機四〇余機が来襲、下田湾内の輸送船やタンカー、兵員輸送船などを繰り返し攻撃した。操縦士が大声で叫ぶ声が聞こえる程低空から機銃掃射し、住民二人が死亡、住家も被弾した。

3 艦砲射撃

海岸線に面する静岡県は一九四五年七月二九日と三十一日、遠州灘や駿河湾の奥深くまで侵入した米艦船より艦砲射撃を受けた。艦砲は空爆と違い、弾道が水平方向であるため破壊力が大きく、また制海権が奪われたことを示しているため精神的ダメージが大きかった。

下田は清水、御前崎、浜松、新居とともに艦砲の攻撃対象とされたが、他と違って米潜水艦による砲撃であった。敗戦二日前の八月一三日午後四時ころ、下田沖に浮上した真つ黒い潜水艦が神子元島灯台に向けて砲撃し、その砲声が町内に響き渡った。

おわりに

本稿の最大の目的は、戦争体験者からの聞き取り調査や手記を通してその実態を探るということであるが、以上の考察から次のようなことが明らかになった。

第一に、戦時体制の貫徹力が想像以上であったということである。人と人との暖かいつながりは相互監視により破壊され、国家と天皇に尽くす体制が組み敷かれた。町内会や部落会、隣組が下からの戦争推進機関として利用され、生活の全てを干渉し続けた。第二に、下田の空襲が軍事拠点ゆえに攻撃目標にされたというところである。防空監視隊や、海上輸送基地、防衛陣地や特攻基地の存在が攻撃対象とされた。第三に、鉾山や特攻基地建設に徴用朝鮮人が強制労働させられていたということである。特に、日

本鉾業河津鉾山蓮台寺鉾や須崎鉾では強制連行が確認された。

韓国の知識人は最近の日韓関係について次のように発言している。「二五〇〇年から三〇〇〇年にわたる、両国間の交流関係は非常に密接であり、世界のどの国、どの民族よりも深い関係の間柄であった。しかし、今われわれ両民族の目の前には解決されねばならない葛藤が残っている。いわゆる植民地統治に対する完全な解決と戦後処理の問題がそれである」。

二一世紀に向けて国際化と協調が進んでいるが、今こそ戦争責任を明確にし、謝罪や戦後補償を通してアジア諸国から真の信頼を得る時がきている。また誤った歴史認識やアジア蔑視の思想がこの戦争を支えたことも忘れてはならない。半世紀前のこの事実を次の世代に語り継ぐことが、本稿の実践的な課題である。

註

- (1) 戦争責任をめぐる日本は、韓国に対しては一九六五年の日韓基本条約で、中国に対しては一九七二年の日中国交正常化で、国家間においてはそれぞれ決着済みとの立場を取っているが、現在国内では未解決とする意見もあり、被害国からも個人訴訟が起こされている。筆者は、この戦争が侵略戦争であり、国家として一日も早く謝罪と補償を行うべきであるという立場に立っている。そのような視点から、本稿において、満州国については偽満州国と表記する。

- (2) 終戦五十周年記念誌編集委員会編、下田市刊、一九九六

アジア太平洋戦争と下田（石垣）

年。

- (3) 静岡県刊、一九九三年。

- (4) 一九九五年四月一日現在において、世帯数一万一一八戸、人口二万九〇三一人、年間観光客数は約四〇〇万人。以上『市勢データ』（下田市、一九九六年）による。

- (5) 一七二〇年浦賀に番所が移ったため廃止されたが、一八四二年に復活、一八五四年に再復活。大坂と江戸の間には菱垣廻船や樽廻船が往来、途中大島（和歌山）、方座、安乗、鳥羽、下田が立ち寄り港であった。

- (6) 神奈川で日米和親条約の交渉が進められ、箱館と下田に開港場が絞られてくると、ペリーはサザンブトン号とパンダリア号の二艦を下田に派遣、港の内外の測量、食料、飲料水、燃料などの調査を行った。以上、下田市史編集委員会編『図説下田市史』（同市教育委員会、一九八八年）五八頁。

- (7) 一九九八年五月四日、下田市柿崎の玉泉寺住職・村上庸道氏からの聞き取り調査による。

- (8) 一九三〇年一〇月一日現在において、世帯数四七三〇戸、人口二万三〇八九人、以上第三回国勢調査による。

- (9) 「満州開拓政策基本要綱」（静岡県県拓魂碑建立委員会編・刊『ああ満州』一九七五年一一頁）による。一九四〇年からの開拓事業はすべてこの基本要綱に基づいて運営され、日満両国の分担区分も具体化された。従来の移民のパターンであった集団・自由の形は、集団・集合・分散の三形態

に改められ、移民という呼称は開拓民、開拓団と変わった。

- (10) 「饒河少年隊」は一九三四年九月、関東軍を退役した東宮鉄男陸軍大佐が、一五歳から二〇歳までの少年一四人をウスリー江の饒河に、特別の精神教育をして入植させたもので、のちの少年義勇隊のモデルになった。以上「青年農民訓練所創設要綱」(同右、一〇頁)による。

- (11) その他の機関・団体は静岡県農会、産業組合中央会静岡県支会、日本赤十字社静岡県支部、大日本婦人会静岡県支部、静岡県医師会、静岡県青少年団、静岡県国防協会、静岡県海外協会、職業協会静岡県支会、満蒙拓土義勇軍父兄会静岡県連合会の一〇機関・団体である。

- (12) 註(3)に同じ、三〇五頁。賀茂郡開拓訓練所規定によれば、その目的は「拓務の訓練を施し、義勇軍の使命を明確にし、大国民的士魂を養う」、「厳正なる規律のもとに団体訓練を施し、健康の増進、堅忍持久、滅私奉公、大陸発展の気風を作興す」というものであった。

- (13) 一九九八年五月三日、外岡清氏(一九三三年一月三〇日生まれ、下田市在住)からの聞き取り調査による。当時、筆者の曾祖父(石垣近平)が区長をしていて彼を送り出した。

- (14) 中隊長は鈴木兼一郎(南崎村長津呂出身、現、賀茂郡南伊豆町石廊崎)。

- (15) 偽満州国浜江省珠河県一面波(哈爾浜近郊)。

- (16) 同右黒河省大額。

- (17) 同右環璽県納金口大成。大成義勇隊の発足は一九四四年六月(結団式は一九四三年一〇月一三日)であるが、早期入植のため大額訓練所在籍のまま事実上一〇月一三日に入植した。

- (18) 註(2)に同じ、八一頁。

- (19) 石垣富久夫(一九三三年九月一八日生まれ、下田市在住)。

- (20) 検査結果は甲種から戊種までであり、甲種と第一乙種は現役入営であった。

- (21) 註(2)に同じ、四〇〜四二頁。

- (22) 一九四二年四月、米軍による制海権掌握を予想して島嶼間の輸送を目的に、陸軍が編成した潜水輸送部隊。一九四五年四月には下田にも一個大隊(六艇)が配属された。後出の「四本土決戦と防衛基地」で詳述。

- (23) 註(2)に同じ、三〇〜三二頁。

- (24) 中国帰還者連絡会は、撫順戦犯管理所に収容された元中国戦犯らでつくる会(一九五七年結成)で、帰国後「戦争体験の生き証人」として日中友好・不再戦の運動をしている。当時、「認罪」「思想改造」という戦争反省行動が認められ、中国政府の寛大政策により釈放された。

- (25) 植松櫛数氏の手記、中国帰還者連絡会編・刊『中帰連』創刊号(一九九七年六月)四七〜五三頁。三光(殺光、搶光、焼光)とは「殺し尽くし、奪い尽くし、焼き尽くす」

の意味であるが、日本軍の行為に対する中国側の表現である。

(26) 石田幹雄氏の手記、同右第二号(一九九七年九月) 六五～六九頁。

(27) 川村忍氏の手記、同右第三号(一九九七年二月) 六五～六九頁。

(28) 野田実氏の手記、同右第四号(一九九八年三月) 二三～三一頁。

(29) 映画『侵略』上映委員会が一九八五年夏、全国の市民運動グループに呼びかけて行った民間調査団に参加したものである。八月一日、吉林市内「老幹部修養所」にて、梁成玉、楊敏の両氏と会見した。

(30) 下田市福祉事務所調べによる。戦死者には戦没年不明の一三人、遺族不明の二〇人を含む。期間は一九三五年から一九四八年まで。戦死場所は出征地とほぼ同じであるが、抑留先のシベリアで死亡した者(二人)や、引き揚げ後病院や自宅で死亡した者(七三人)もある。以上、註(2)前掲書二六二～二六三頁。豆陽中学校では、学年で二割の戦死者を出している。以上、『豆陽会会員名簿』(下田北高等学校同窓会豆陽会編・刊、一九七〇年) 四六～五三頁。

(31) 註(3)に同じ、一七七頁、駿東郡原里村における国民精神総動員強調週間の行事計画。

(32) 同右、二二四頁、「静岡県広報」三七二〇号。

アジア太平洋戦争と下田(石垣)

(33) 註(2)に同じ、九五頁。

(34) 註(3)に同じ、七三一頁、大日本国防婦人会静岡支部の会員誓詞。

(35) 註(2)に同じ、二二八頁。

(36) 註(3)に同じ、一七八頁、風俗関係営業者の自粛自戒。

(37) 註(2)に同じ、二二七頁。

(38) 同右、二一九頁。

(39) 一九九九年三月二〇日、下田市の自宅での聞き取り調査による。

(40) 註(3)に同じ、七二〇頁、「静岡県下の会社工場に於ける産業報国会の実況」。鈴木織機は静岡県西部の代表的な優良企業で、現在のホンダ、ヤマハと並ぶ二輪・軽自動車メーカー、スズキの前身企業である。

(41) 同右、七二五頁、県商業報国会の結成。

(42) 同右、七三〇頁、農業報国会静岡県支部規定。

(43) 同右、七二八頁、林業勤労組織確立に関する件依命通牒。

(44) 『大空襲 郷土燃ゆ 静岡県戦災の記録』(静岡新聞社、一九八五年) 二四八頁、および体験者の記録による動員数で、学年は動員決定時のものである。男子は豆陽中学校(現、静岡県立下田北高等学校)、女子は下田高等学校(現、静岡県立下田南高等学校)の生徒である。

(45) 調査用紙のタイトルは「戦争体験記述用紙」とし、調査

内容は、①学徒勤労働員の様子、②豆陽中学校時代の様子、③下田空襲、④当時の民衆や学生の戦争史観について、⑤在日朝鮮人の様子などを設問した。郵送による調査で、不明部分は電話で確認した。一部聞き取り調査も行った。

(46) 一九二八年八月六日生まれ、東京都日野市在住。

(47) 内訳は豆陽中学校四年約一〇〇人、日川中学校四年約一〇〇人、湘南中学校四・五年約一〇〇人、平塚高等女学校五年約一〇〇人、伊東高等女学校四年約一五〇人、東京帝国大学若干名、名古屋帝国大学若干名、相洋中学校三・四・五年約三〇〇人、相女商業学校三・四年約二〇〇人、寒川国民学校高等科若干名、平塚国民学校高等科若干名、東京物理学校二年約一〇人、平塚工業学校若干名、横浜商業学校若干名。六月以降は法政大学その他。

(48) 鑑賞した映画は「三尺左吾平」「生産防衛」「日常の戦ひ」(以上いずれも平塚劇場で八月二〇日に上映)、「激流」(同上、九月一九日に上映)、「海を耕す」「河童大将」(同上、九月二四日に上映)などである。

(49) 一九三〇年一月二〇日生まれ、下田市在住。

(50) 一九三二年二月二日生まれ、東京都練馬区在住。

(51) 一九二五年六月一〇日生まれ、同右。

(52) 静岡県朝鮮人歴史研究会編・刊『祖国解放五〇周年記念―朝鮮人強制連行の傷跡(静岡県編)いやされぬ過去』(一九九五年)八頁。

(53) 静岡県近代史研究会編『史跡が語る静岡の十五年戦争』(一九九四年、青木書店)一〇〇頁。また、註(52)前掲書、一二頁、五五頁、一三〇頁。

(54) 註(3)に同じ、三六三〜三六四頁。

(55) 厚生省の名簿(厚生省報告書のうち日本鉱業株式会社の河津鉱山の分)等より筆者が算出。なお、同名簿については、静岡県近代史研究会の竹内康人氏より提供していた。

(56) 一九二二年八月一〇日生まれ。厚生省の名簿より強制連行を確認。本卒業論文作成調査中に病死。一九九九年三月二〇日、遺族(新農ひつえさん)との自宅(静岡県下田市)での聞き取り調査による。

(57) 註(2)に同じ、一一〇頁。

(58) 同右、一八七頁。

(59) 註(52)に同じ、一〇頁。佐々木氏は連行された人達の労働条件や生活について、「住宅もあり、給料も相当の支給があった」と述べているが、これらからは決して彼らの生活や労働条件が楽ではなく厳しいことがわかる。佐々木氏の記述は、強制連行期以前の朝鮮人坑夫の就労の様子ではないかと推測される。

(60) 註(3)に同じ、三七二頁、日本鉱山協会「半島人労務者に関する調査報告」。

(61) 第四回国勢調査(一九三五年)による。人口は二万四一九人。

(62) 防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書』本土決戦準備

へ1) 関東の防衛(朝雲新聞社、一九七一年)五〇一頁。

(63) 同右、五一五頁。

(64) 同右、五一六頁。

(65) 全長二三メートル、全幅五・五メートル、速力二五ノット、搭載量人員一〇〇人または貨物五〇立方メートル。一九四二年頃から開発が始められ、一九四三年初め試作、敗戦まで六〇隻が建造された。

(66) 陸軍が開発した小型潜水艇で、全長四九・五メートル、全幅四・七メートル、排水量は水上二七三トン、水中三六四トン。乗組員は将校三、下士官兵二二。最大速力水上九・六ノット、水中四・四ノット、航続力は水中四ノットで一時間、二ノットで六時間、水上二六〇〇海里、搭載量二四トン。安全潜航深度一〇〇メートル。敗戦まで日立製作所(山口県下松市)、日本製鋼所(広島県海田市)、安藤鉄工所(東京)、朝鮮機械製作所(仁川市)で三九艇が建造された。岡本康文『陸軍潜航輸送艇隊出撃す』(私家版、一九九八年)五六頁。

(67) 一九九九年三月二〇日、自宅(下田市)にて聞き取り調査。高橋氏は一九一九年生まれで、職業軍人でノモンハン事件にも出征経験がある。

(68) 註(2) 前掲書、二〇三頁。

(69) 一人乗りの一型は全長五・一メートル、全幅一・六メートル、排水量一・二九トン、速力は通常一六ノット、最大

二三ノットである。その後、指揮艇用としてひとまわり大きい五型が登場する。敗戦までに合計約六二〇〇隻が作られた。

(70) 同校には、第三校舎に陸軍砲部隊が特攻隊用食料貯蔵に、講堂(現、図書室)には海軍第二六嵐部隊の特攻隊員がそれぞれ駐屯していた。以上、註(44) 前掲書、二四八頁。

(71) 「海龍」は二人乗りの有翼小型の潜航艇で、全長一七・二八メートル、全幅一・三メートル(翼を除く)。艇首に六〇〇キロの爆装をしたもので、本土防衛用に開発された水中特攻兵器である。敗戦までに横須賀工廠等で合計二二四隻が完成していた。第六海龍隊は隊長・難波昂二大尉で、配備艇は一三隻であった。通常、支援の母船とともに配備されるが、単独配備された。

(72) 註(2) に同じ、一四五頁、内藤世水と望月春四の両氏の日記。結局、同部隊の兵士は八月二五日に武装解除し引きあげた。

(73) 平塚征緒『米軍が記録した日本空襲』(草思社、一九九五年)二三六頁。

(74) 同右、六頁。

(75) このB 29は、米カンサス州スモーキーヒル基地から東まわりで、マラケシュ、カイロ、カラチを経由し、一万八五〇〇キロメートル離れたカルカタに配備された。

(76) 註(73) 前掲書、二三六頁。

(77) 註(53) 前掲書、一一九頁。

(78) 町民のみの数字である。陸軍暁部隊(一九四五年四月一日)の被害や、海軍第一六嵐部隊の被害(同年六月一日)等を含まない。

(79) 一九七〇年および一九七五年の二度にわたって、静岡県民生部の依頼により下田福祉事務所が調査した結果による。

(80) 朝日新聞静岡支局編『静岡の戦争』(彩流社、一九八五年)二四四頁。

(81) 「下田国民学校校務日誌」(下田市立下田小学校所蔵)、註(2) 前掲書、註(44) 前掲書などより筆者集計。なお、軍の人的被害を除く。

(82) 註(2) に同じ、一四三頁。

(83) 小川仁示訳『米軍資料・日本空襲の全容』(東方出版、一九九五年)五七頁。「作戦任務第六二三号」は、コード名をエンキンドルNo.8といい、目標は中島飛行機武蔵製作所、参加部隊は第七三航空団、機数は一一四機(約九〇機のP51の航法援助を行った四機は含まず)、第一目標爆撃機数の割合は八二・五%。

(84) 註(2) に同じ、二八七頁。

(85) 同右、一四四頁。

(86) 註(83) に同じ、一四一頁。このうちから下田を攻撃した一機を特定するのは困難である。

(87) 了仙寺は幕末開港時の一八五四年三月に日米和親条約が

締結されるとベリー一行の応接所となり、林大学頭とペリーとの間に日米和親条約付録下田条約が調印された寺である。これにより、玉泉寺とともに米人休息所となった。また、防空壕は洞窟古墳でもある。

(88) 註(83) に同じ、一七頁。

(89) ソウル大学名誉教授・李相禧氏の講演原稿「歴史の中の記憶と忘却」(「広島修道大学主催国際シンポジウム」日・韓関係昔と今」一九九七年三月二〇日)による。また、一九九七年二月六日、ソウル市の同氏自宅にて筆者の聞き取り調査による。

(追記)

本稿は、文学部史学科(通信教育部)に提出した一九九九年度の卒業論文を縮小したものである。論文作成にあたって、多くの個人・団体に協力をいただいた。直接聞き取り調査を行うことを心掛けたが、一部は郵送による調査に依った。下田への現地調査(震洋基地跡、潜水輸送艇基地跡等)や訪問(被強制連行者の遺族宅、体験者宅等)を行った。関連して国内の各種集会(中婦連)や映画会(「ナナムの家Ⅱ」[南京1937])等にも参加し、中国(註(29)参照)や韓国(独立記念館、安重根記念館、江華歴史館、従軍慰安婦記念館・ナナムの家)、台湾等での調査研究も加えた。